

未来を担う子どもの資質・能力を高める学びの実現

—持続可能な「地域とともにある学校」を手がかりとして—

保科 優子(22035)

1. はじめに

今日子どもたちが、予測困難な厳しい社会変化の中でもたくましく生き抜いていくためには、社会や人との関わりを大切にしながら社会的自立に必要な資質・能力を身に付けていかななくてはならない。そのための方策として、コミュニティ・スクール(以下、CS)と地域と学校の協働的な活動(以下、地域協働活動)の一体的な推進が求められており、教育課程の充実に向けた学校・地域・行政の効果的な協働が必要とされている。

所属校では、地域協働活動を通して、教職員が生徒の成長を実感できる反面、各活動のカリキュラムにおける位置付けが単発的であったり、教職員の人事異動により活動の継続が困難な状態になったりすることがある。学校や地域の実態を把握しつつ、これらの課題を解決することが大切だと考え、本テーマを設定した。

2. 研究の目的

学校教育目標の具現化を目指すために、持続可能な「地域とともにある学校」を手がかりとした、生徒の学びを実現する手立てを明らかにする。その際、教職員の協働により、総合的な学習の時間を中心としたカリキュラムを見直し、学校と地域の協働の課題やその方策について関係者と協議し検討していく。

3. 研究方法

- (1)県内及び角田市の地域協働活動に関する調査
- (2)所属校の実態把握
- (3)サーバント・リーダーシップを手がかりとしたミドルリーダーの働き
- (4)総合的な学習の時間における教員との協働
- (5)校内ワークショップの計画と実施
- (6)効果的な地域協働活動を継続していくための提案

4. 研究成果

- (1)県内及び角田市の地域協働活動に関する調査

1年次には、仙台市教育委員会学びの連携推進室及びCSが設置されている県内の小中学校三校、角田市教育委員会を訪問し、CSと地域協働活動の一体的な推進に関する現状についてヒアリング調査を行った。仙台市教委では、「仙台自分づくり教育」を推進し、子どもの資質・能力の育成に取り組んでいる。その先進校である仙台市立 T 小学校では、教職員・保護者・地域が三者協働で児童が自らの夢をかなえる力をはぐくむことを目標に協働の組織が確立され、教育効果を高めている。ヒアリング調査を行った小中学校には、熟議(熟慮と議論)を通して地域の声を多面的に聞くことができるという共通点が見られた。しかし、地域協働活動に関しては、地域連携担当教員の連絡・調整をする業務の負担が大きいという実態もあった。また、角田市では地域学校協働本部の立ち上げに向け、学校支援ボランティアの派遣を進めている。学校と行政の更なる連携強化が望まれる。

2年次には、宮城県教育委員会生涯学習課を訪問し「みやぎの協働教育」の現状と課題について聞き取り調査を行った。県では、地域協働活動に関わる関係者への研修会を開催し、市町村の教育活動を支援している。地域協働活動の効果として、子どもの地域に係る理解・関心の高まりや知的好奇心の向上などが見られるが、一方で教職員の負担軽減、意義や効果の周知が課題であることが分かった¹⁾。

(2)所属校の実態把握

①生徒の資質・能力に関する実態

令和3年度及び4年度全国学力・学習状況調査の生徒質問紙の回答では、自己肯定感、多様な価値観の受け入れ、協働的な学びに関する項目について、肯定的な回答率が全国値より15ポイント近く低い結果となっている。また、令和5年3月、全校生徒を対象に、回答フォームにより学校教育目標に関する自己評価、及び地域協働活動に対する学びについて記名式の質問紙調査を行った。学校教育目標に関する自己評価では、

「課題解決に向けて自ら考える力」「他者との協働的な学び」「失敗を恐れず挑戦していく力」を向上させていくことに、そして地域協働活動に対する学びについての質問に関する回答からは、生徒が自らの成長を実感できるようにしていくことに、それぞれ課題が見られた。

②地域協働活動に関する教職員の意識

令和4年8月、教職員を対象に、回答フォームにより無記名式の質問紙調査を行ったところ、「地域協働活動は生徒の成長に有効である」と回答者全員が肯定的な回答だった。その理由は「自分の進路を見つめ直す機会にできる」「地域に貢献することで自己有用感が高まる」「教員が話すよりも説得力がある」などであった。しかし、計画・準備・打合せには負担を感じていると回答した教員も多かった。「打合せの時間が取れない」「協力者との活動の目的の共有が難しい」「会場設営の準備の手が足りない」がその理由としてあげられた。とりわけ、教員個人の経験値や力量の偏り、多忙感、学年経営・教科特性への依存による各部署の分断化が課題として見られた。

(3)サーバント・リーダーシップを手がかりとしたミドルリーダーの働き

生徒の資質・能力及び教職員の意識に関する課題を解決していくためには、教職員が学年や教科の壁を超えて協働し、生徒にとって効果のある学びを実現することが大切である。学校は、チームとして力を発揮することができるよう、校長のリーダーシップの下、組織マネジメント力を強化していく必要がある。

そこで、学年や教科等の各部署をつなぐ際にミドルリーダーの働きが重要であると考えた。ミドルリーダーが学校組織に有機的に機能していくために、参考となるのがサーバント・リーダーシップの考えである。サーバント・リーダーシップとは、構成員一人ひとりの目標達成のための心理に寄り添うこと(サーバント)により、組織全体の目標を達成しようとするリーダーシップである。これらの働きかけにより、構成員の意欲や内発的動機付けを高めることを目指す²⁾。このような役割を持つミドルリーダーの取組が、生徒の資質・能力の向上という共通の目標に向かう教職員の協働の原動力になるのではないかと考えた。

また、学校だけではなく、地域の教育力が生徒の学

習意欲を高め、成長を支える大きな役割を担っている。地域の人々が学校運営に参画し、学校と地域が共有した目標に向かって共に協働して活動することで、教職員が異動になっても生徒の成長にとって効果のある学びを継続させることができる。このような学びが継続性を保ちつつも、地域や生徒の実態に応じて定期的に組織やカリキュラムを更新させていくことを、持続可能な「地域とともにある学校」と捉えることができるのではないかと考える。

これらの課題意識を踏まえ、所属校の実態に応じて筆者を含む数名のミドルリーダーを中心とした学校組織マネジメント力の強化、カリキュラムデザインの見直し、地域協働に関わる関係機関との連携体制の構築の三点を、2年次の主な実践とした。

(4)総合的な学習の時間における教員との協働

校長のリーダーシップの下、地域連携担当・教務主任・研究主任と協働しながら、各部署のつなぎ役となることを試みた。

①学校教育目標に直結する総合的な学習の時間による生徒の資質・能力の育成

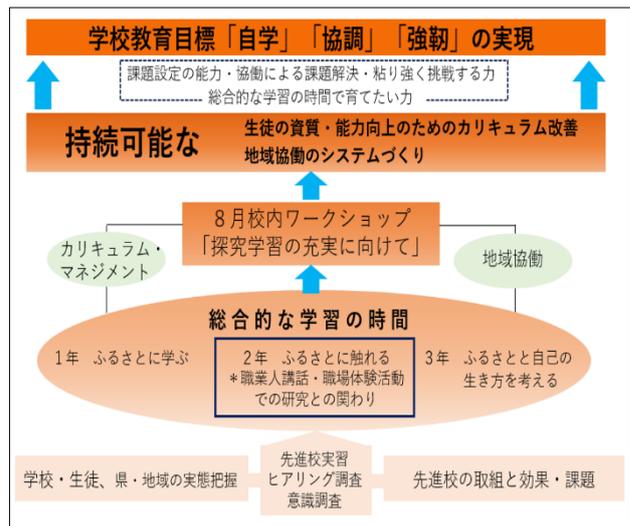


図1 研究構想図

「地域とともにある学校」を実現する中心的な教育活動として、総合的な学習の時間に着目した。総合的な学習の時間を通して育成を目指す資質・能力は学校教育目標と直結する。そして、その学習は探究的な見方・考え方が学びの根幹となる。さらに、地域の教育資源の活用は、一層充実した学習とするための不可欠な要素の一つである。そこで、角田市教育振興基本計画³⁾と学

校教育目標「自学」「協調」「強靱」、並びに生徒の実態調査から、総合的な学習の時間で育てたい資質・能力を「課題を設定する力」「協働による課題解決力」「粘り強く挑戦する力」の三つに整理し、(5)で述べる校内ワークショップで提案し、教職員で吟味した。このワークショップで話し合った内容を基に、ミドルリーダーが中心となって指導計画の見直しを進めるとともに、課題を行政とも共有して地域協働活動の円滑化について協議した。

②2 学年総合的な学習の時間への参与観察

2 学年の総合的な学習の時間を参与観察し、地域協働活動の課題を分析した。2 学年は 6 月に職業人講話、9 月に職場体験を行う。これらは地域協働活動の中でも中心となるものであり、市内事業所の協力が不可欠である。活動の目的は、勤労の体験を踏まえ、その意義を理解し、自己と地域の結び付きやこれからの生き方について考えていく態度を養うことである。参与観察をしつつ、目的達成のための効果的な手立てについて学年教員たちと話し合った。学年主任とも緊密に情報交換を行いながら、事業所への依頼・調整を行い、生徒たちの活動を参観した。これらより、生徒が課題意識を持って臨む仕掛けが必要であること、学校と事業所間の活動の目的共有のために、活動計画・実施において見直しが必要であると感じた。

③生徒の成長や課題の可視化とその後の取組

これまでの現場経験を振り返ってみると、教育活動のねらいを前年度と同様に設定したり、活動後の生徒の表情や感想から高い効果が得られたと評価したりしがちだった。そこで、各活動における効果はどの程度得られているのか、生徒の成長や課題を可視化し、教員間で共有して次の活動の手立てを検討した。6 月の職業人講話、9 月の職場体験後に行った生徒自己評価の肯定的回答は図 2 のとおりである。

職業人講話の自己評価では、生徒が自らの「問い」を持って活動に取り組むことに課題があることが分かった。この課題を受けて、学年主任は職場体験に向けて、指導の時間配分やワークシートの内容の改善を試みた。職場体験後には、自己評価のすべての項目において生徒の成長を示す回答結果が得られ、担当教員も達成感を感じるようになった。

さらに、今年度 12 月、p4c の手法により 2 学年の一学

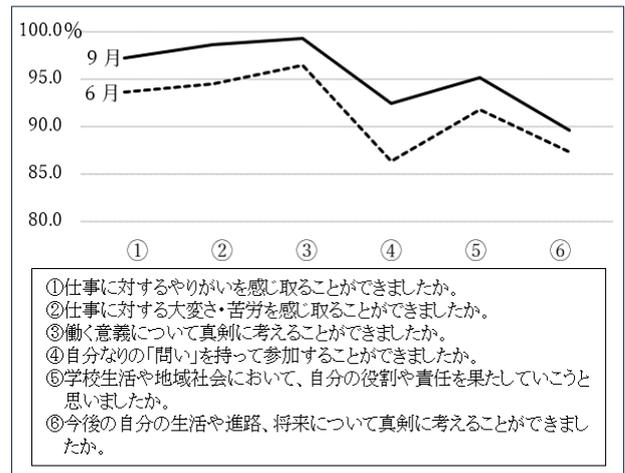


図 2:2 学年生徒の 6 月と 9 月の肯定的回答の変容

級で「自分たちが地域のためにできることは何か」という問いについて考えさせた。意見が出るまでに時間を要したが、「定期的に地域住民と中学生が関われるような取組を検討してほしい」という協力事業者からの意見を紹介すると、清掃活動、小学校のクラブ活動の手伝い、地域住民の学校行事への招待など、関わり方の具体を検討し考えを深める姿が見られた。

学年教員は、生徒たちがいつもと違う手法でも考える機会を得たことは貴重な経験であった、と感想を述べた。

(5)校内ワークショップの計画と実施

今年度 8 月、テーマ「探究学習の充実に向けて」の下、校内ワークショップ(以下、WS)を実施した。目的の一つは、総合的な学習の時間を中心としたカリキュラムの見直しに向けて、全教職員で協働していくことである。二つ目は、3 年間の学習の系統性を整え、今ある素材を活用して探究学習を充実させることである。

①WSの概要

具体的な方策に関する三つのグループ(A, B, C)のそれぞれで話し合ったテーマは以下のとおりである。

- ・A『総合的な学習の時間』の 3 年間の系統性を踏まえた学習活動の具体案
- ・B『総合的な学習の時間』における地域の素材の効果的な活用
- ・C「教科横断的なカリキュラムにするために総合的な学習の時間を核とした各教科で重点化したい単元」

また、2 学年主任は、行政との連携や小規模化していく市内の事業所の実態から感じた地域との協働の課題について、話題提供をした。

②WSにおけるミドルリーダーの役割とWSの成果

ミドルリーダーである筆者、主幹教諭(地域連携担当)、教務主任、研究主任は各グループのファシリテーターを担った。事前に話合いの内容、グループ編成や提供する資料についての意見交換を行った。当日は、それぞれが担当する校務分掌の強みを生かして助言したり、意見を傾聴、共感したりすることを通して同僚の意見に寄り添い、サーバント・リーダーシップを発揮していた。

各グループから提案された内容は以下のとおりである。

- ・A: 地域を知るところを起点に社会への理解を深め、職場体験や自己の進路選択を主軸にキャリア教育に力を入れていく。特に「思考力・判断力・表現力」のうち「身近な地域の中から課題を見出す力」「適切に表現したりまとめたりする力」を伸ばしていくことが喫緊の課題である。
- ・B: 地域に協力してもらおうという受け身の活動が多いため、生徒から地域へ発信していく活動が必要である。そのためには教師も地域を知ることが大切だ。また、学校と地域が学習の目的を共有する必要がある。教育資源を活用する際に行政との連携を強化していきたい。
- ・C: 教科の枠を超えて、向上させたい生徒の資質・能力を互いに話し合う時間が確保できるとよい。教科の特性を踏まえ、教科横断的に指導していくことを意識する。

昨年度の地域協働活動に関する質問紙調査では、「計画や準備が大変である」という回答率が高かったが、その多忙さを改善させるための具体案、教職員が学年や教科の枠を超えて指導の方向性を共有することの意義、さらには生徒の成長の可視化の必要性が語られるなど、教職員の意識の醸成を図る場とすることができた。

(6)効果的な地域協働活動を継続していくための提案

①総合的な学習の時間を中心とした指導計画の見直し

WSで検討した学習活動や教科横断的な指導計画を基に、学習活動そのもの見直しや改善を踏まえたカリキュラムデザインを作成する。担当教科の指導する内容が、どの時期のどの教科と関連があるのか、どのような力が身に付いているのか、一覧を見て分かるようにする。これを教育計画に加えることにより、各学年・各教科の単発的な指導ではなく、見通しを持った指導計画が可能となる。

②行政との協議

今年度12月、角田市教育委員会と今後の地域協働活動について協議を行った。協議では、各活動における生徒の成長と課題を共有した。また、WSの内容について話題提供し、学校が地域協働活動をする際に課題と感じていることについて相談した。特に職場体験では生徒を地域全体で育てるという意識を持つために、事業所側と活動の目的を共有すること、学校・地域・行政の協働の強化が必要であることを確認し合った。地域連携担当教諭と行政が互いに顔を合わせて話し合う場が設けられたことにより、今後の連携促進を図る基礎的なシステムができつつある。

5. 終わりに

地域とともに生徒の資質・能力を高める学びを実現していくためには、まず教職員間で目指す生徒像を明確にし、共有していく必要がある。その際に、サーバント・リーダーシップを発揮するミドルリーダーの働きかけが組織マネジメント力の強化に有効であった。行政との連携も、学校現場が抱える課題を解決していく一要素となる。

参与観察を行った2学年では、地域協働活動における生徒の意欲が向上し、総合的な学習の時間で育成したい資質・能力の向上の可能性が見えてきたところである。今後はWSでも提案されたように、学校が受け身の姿勢ではなく、生徒の協働的な学びにより自己や地域の課題を解決していく探究活動の充実が必要とされる。

また、来年度からCSの活動が本格化し、生徒に関わる大人たちの協働がますます期待される。探究を続ける生徒たちを支える地域学校協働本部、学校運営協議会等の組織をはじめ、代表者だけではなく、学校・行政・地域住民それぞれ個人が顔を合わせて相談できる関係を築いていくことが大切である。

引用・参考文献

- 1) 宮城県教育委員会:令和4年度地域学校協働活動の実施状況に関するアンケート調査報告書(2023)
- 2) 本図愛実,丸山千佳子:サーバント・リーダーシップで捉える教育長像—期待によるアイデンティティの形成—。宮城教育大学紀要(2022)
- 3) 角田市教育委員会:第2期角田市教育振興基本計画(2022)

未来を担う子どもの資質・能力を高める学びの実現 ー持続可能な「地域とともにある学校」を手がかりとしてー

保科 優子(22035)

要旨 学校教育目標の具現化を目指すために、持続可能な「地域とともにある学校」を手がかりとした、生徒の学びを実現する手立てを明らかにした。その際、教職員の協働により総合的な学習の時間を中心としたカリキュラムを見直した。

1 年次では、地域学校協働活動に関する県内の行政並びに学校の実態調査、所属校の生徒・教職員を対象とした意識調査を実施し、それぞれの課題について分析した。2 年次では、サーバント・リーダーシップを参照し、総合的な学習の時間において職場体験を実施する 2 学年の教員と協働しながら、生徒の課題解決に取り組んだ。また、所属校の課題を踏まえて校内ワークショップを計画・実施した。これらの実践を通して、地域学校協働活動における生徒の意欲が向上し、学校教育目標の具現化の可能性が見えてきた。さらに、教職員の協働により、学年や教科の枠を超えて指導の方向性を共有することの意義などについて、教職員の意識の醸成が図られた。

キーワード: 地域学校協働活動, 総合的な学習の時間, 職場体験, サーバント・リーダーシップ, ミドルリーダー

ユニット指導教員(◎ユニット長, ○副ユニット長)

◎本図 愛実, ○岩田 光世, 深澤 祐司, 宮澤 孝子